

中国帰国児童教育

中国と日本の架け橋になろう

1. はじめに

本校は垂水区の西の端、西区、明石市と接するところに位置する。校区は、県営住宅、公団住宅を中心に高層マンション、一戸建て住宅などが混在する住宅地域である。1975年頃より中国から引き揚げてきた残留孤児・婦人の方々がこの地域に定住するようになった。現在、『童童教室』（昭和61年9月開設 日本語教室・母語支援教室）で学ぶ子どもたちは26名（内、中国籍21名）いる。そのほとんどが残留孤児・婦人の三世、四世の子どもたちである。そのため、地域福祉センター内に日本語教室を開設したり、学校行事（入学式・運動会・音楽会）で中国語のアナウンスをしたりするなど、中国帰国者の立場に立った配慮がなされてきた。また、地域をあげての住みよい街づくりへの意欲が高く、「ふれあい運動会」、「敬老の集い」を地域住民が中心となって行っている。

2. 中国帰国児童教育

童童教室では、「日本語教室」と「母語支援教室」（「ふれあいタイム」）を行っている。また、保護者のネットワークを広げたり、コミュニケーションを深めたりするために、「童童保護者会」を実施している。

また、生活科や総合的な学習の時間の中では、全ての児童が帰国児童の立場に立ち、正しい認識の下に神陵台の校区に住む中国から帰国した方たちへの理解と交流を深めていくために、中国残留孤児・婦人についての学習を系統立てて行っている。しかし、「中国語をしゃべりたくない」「自分を出さず、みんなと合わせる」というように、「中国とのかかわりを出さない方がよい」と考える子どもも少なくない。それは、偏見や差別意識への恐れでもあり、自分を守りたいという防衛心の現れであると考えられる。そんな子どもたちが周りの子どもたちとともに中国、日本の両方の文化のよさを理解し、日々の生活に生かし、両国の懸け橋となって友好を深めるというダブルの発想を持って、前向きに自分と中国とのかかわりとらえ、史実を正しく理解できるようにしたい。また、彼らをとりまく周りの子どもたちも、帰国児童と中国とのかかわりを正しく理解し「偏見や差別的な言動をしない、させない、放っておかない。」という態度を養いたいと考えた。

3. 「中国へ帰れ」は絶対に許さない

中国残留孤児・婦人についての正しい認識を卒業までに子どもたちがもてるようにするためには何が大切か。中国帰国児童が胸を張って、中国のことを語り、自信を持って自分の思いを周りの友だちへ伝えていけるように自尊感情を高める。また、中国と日本の二つの文化の中に生まれたことに誇りを持ち、両国文化の交流の中心となる架け橋として活躍できるようにするためには中国残留孤児・婦人についての理解を深めることが最も大切であると考えた。その際に学年、クラスだけの学習に終わらず、一年生から系統立てて、本物の中国と出会わせていくことを中心に据え、カリキュラムを考えていった。まだ、完全ではないが、共通理解の下で実践を進める中で、中国の文化、残留孤児・婦人についての史実、ダブルの感覚（ハーフではない。日本と中国、人生を二倍味わえるチャンスがある。）の理解について少しずつ深まりをみせている。その結果、最近では「中国へ帰れ」という言葉は聞かない。しかし、中国の関係する事件が起きると心ない言を帰国児童に浴びせる事例はまだまだある。今後の取り組みの中で本当に子どもたちが互いの違いを認め合い、大切にし合える関係を育てていきたい。

4. 自分を大切に、仲間を大切にできる子めざして

まずは中国人として日本で生きていること、子どもたちへどのような思いや願いをもって生きているのかをきちんと受け止めることから始める必要がある。そして、それらを子どもたち、保護者、教師で共通理解していくことからスタートである。

校区の中にはさまざまな背景を背負い生きている子どもたちが多くいる。このような中で、子どもたち(全校生)にとって学校が安心して楽しく過ごせる場所であるために、支援の必要な子どもたちを核として、系統立った教育活動を推進している。どんな小さなことも共通理解を欠かさず、教職員全員の思いや願いが直接一人一人の子どもたちに伝わるよう、「全員で」という意識を常に忘れずかかわっている。常に「生きる力」の根っこの部分を見つめ、取り組みをふりかえり、「みんなで」という気持ちを忘れずに子どもたちと歩んでいきたい。

本校研修記録冊子 平成23年度「けやき」より 一部抜粋